

ガブリエル・サイード著 非生産的發展一2

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2017-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 早代 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/18419

非生産的發展 — 2

ガブリエル・サイード 著
高橋 早代 訳

児童労働

子どもたちのハンディキャップ

うるさい隣人を黙らせるのは厄介だ。職権乱用に立ち向かうのも、上司の失策を予言し、不心得者を従わせるのも容易なことではない。それに対して悪行の芽を摘み、市民としての自覚を持たせ、言葉を尽くして諭していくのはまだ可能である。なぜなら（ある年齢までの）子どもは申し分のない大きさであるからだ。

愛と力と自慢の対象で子どもに勝るものはない。呼べば応え、命令に従い、愛撫し、見せびらかす対象として犬、猫、カナリアに軍配を上げる者たちは自分が何を失っているのか知らないのだ。

小さな子どもたちが、まるで何事でもないかのように階級闘争の前面に出ていくことがある。反動的な作家によって貧しい子どもたちが金持ちの餌食にされかけたこともあった。これらは産業構造のなせるところであったかもしれない。産卵鶏のようにケージに押し込められた女たちが産み落とした子どもたちは、そのままベルトコンベアーに乗せられて、人の手を煩わせることもなく缶詰工場に直行したようなものだ。

しかし、近代化によりさらに巧妙な子どもの利用方法が可能となった。貧しい子どもたちを製造しなくてはならない。そうだと！ ただし、金持ち

たちに対抗する貧民子ども部隊としてだ。それは外貨不足の国を支える軍事産業とも言えるだろう。貧しい子どもたちの軍隊は、その存在事実だけで帝国主義を糾弾する材料となり、美德を勝利に導く前線部隊と化するのだ。

生まれてこない権利——それは非現実的な「無」を主張しているかもしれない——は、非現実性が反作用的であることを繰り返し明らかにしている。つまり子どもの権利は、決して現実の存在に先んずるものではないということである。

無であり続けることで失うものは何もない。人間であることを除けば、だ。飢えて死んだ子どもたちの存在は良識を目覚めさせ、私たちが不正と闘う力となる。金持ちどもに真実を叩き付けてやることができる。飢え死にした子どもたちが、進歩によって踏みしだかれた他の種のように消えていくのであれば、動物学的な保存のために世界規模でキャンペーンを行わねばならないだろうが。

どうか科学の力によってこの子どもたちがより素晴らしい存在となることを。いつの日か、さほど遠くない未来に、貧しい人々のDNAに一つのイデオロギーが刻印されるかもしれない。赤貧にあえぎながら今は主体的というよりも客体として革命的な役割を果たしているこの子たちは、その時が来たら、サーカスの砲身の中に身をひそめる人間大砲の男たちのように、もしくは日本の英雄的なカミカゼパイロットたちのように、母親の懐の中から人類の善なるものに向けて撃ち出されていくに違いない。

家庭内児童労働

前項では、まずまずの耐久性を持つ個別もしくは集合的消費財の観点から子どもたちを見てきた。しかし、さらに言うならば、子どもは現金もしくは現物を産み出す一つの資本財でもあるのだ。

資本財として考えるならば、子どもと家畜では到底比べものにならない。犬にパンを取ってこさせようとするならば、うんざりするほどトレーニング

が必要だ。しかもそのコストたるや、犬一匹飼うよりも安いわけではなく、両者の生産性の差は歴然たるものである。一匹の犬の資産評価益は、ほぼ常に一人の子どものそれに及ばない。

さらに良いのは労役用の去勢牛やロバとの対比であって、これらの家畜は経費を大きく上回る有益な労働を生み出す資産である。すべての資本財同様に、一定期間は収益を生まないが、しばらくすれば稼ぎだして、いずれ経費以上のものを生産することになる。

種々の手工芸や家庭内製品で明らかなことは、(大地の恵みとは違って)息子や娘一人一人に生産手段を増やしてやれることだ。ところが、まさしくそのために家庭内児童労働の振興に反対する社会主義的な労働者たちがいる。理由は子どもたちが搾取の対象となるから、ということだ。

どうか多くのエコノミストたちがそのような考え方に捉われないことを！親にとって子育ての費用は割に合わないため、出産が実利的であることを忘れがちであるが、それが今日まで実現可能であったばかりか巨大な資本を蓄積したことから見ても歴史的事実に相違ないからだ。

当然ながら収益は結果やコストの中心をどこに設定するか——人間、国、特定の人口セクター、家族、個人——によって違ってくる。家畜の仔の場合、出産は動物の親ではなく所有者の利益となる。それに引き換え、大学生をいくら増やしても誰の利益にもなりはしないだろう。

計算違い

1960年より少子化対策プログラムの経費と収益が見積もられて来た。世界銀行の研究から導き出された結論は、国・時代を問わず、具体的な数字ははともかくとして、出産は間尺に合わないビジネスであるということだ。研究者は、その事実を手放して称賛しているわけではないが、次のケースを見落している。

一人のダウン症の子どもを育てる費用は膨大で、仮に親が子どものために

あらゆる専門家の治療を望むのであれば、家計はたちまち破綻すること。また半ダースの大学生を育て、その子たちが働き始める前に結婚し、それぞれが半ダースの大学生を育てることになれば、結果は同じであること。しかし、ここに一人の息子がいて、学校に通わず、限界消費環境の中で育ち、4～5年の間は家庭内作業所で使い走りのようなことをやっているとするれば話は違ってくる。

生産者を一人増やすには、(そのコストが将来生産することになるものと同等もしくはそれ以下であるとしても) さらにコストがかかるはずだ。ライフサイクルの最終結果は、あらゆる投資が生産手段次第で割高になるか生産性を保持するかによって決まるだろう。

もう一つの要素は、非生産期の計算の仕方と、稼ぎが誰のためであるかということだ。親のためであるならば必死になるだろう。つまり子どもは最小限の消費に耐え、できる限り早く働きはじめ、稼ぎを親に渡す。そして自分の家を建てるのが遅くなくても収入の一部を渡し続けるだろう。親が老いて働けなくなればなおさらである。

これが途方もない必要条件でないことは明らかだ。時とともに出産に対して報奨金が授与されるようになり、それが多くの地域で伝統になっている。

結果的に言えることは、経済の知識もなくバースコントロールも知らない農民たちに問題があるわけではなく、この解決不可能な問題の広がり hands 貸しているのは以下のようにわれわれ自身だということだ。

- a) 農民たちに彼らの生活形態に見合った生産手段を提供する代わりに、都市生活者である我々の生き方と、その途方もないコストを受け容れさせようとするとき。
- b) 農民に比べてより多くの収入を得ている我々の方が生命力旺盛だと思うならば、事実はまさしく反対だ。つまり一人の陶工が6人の息子を陶工として持つならば、彼は6人のエコノミストを息子に持つ一人のエコ

ノミストよりも経済性に優れているということだ。

原註

アイルランドの貧民の子どもたちが親もしくは国の負担となることを防ぎ、社会的に有益な存在たらしめるための穏健な提案は、Swift, Jonathan, *Una modesta proposición y otras sátiras* (一つの穏健な提案とその他の風刺), 1729, pp. 17-30. *The economist* の「子どもへの残虐行為」によれば、イングランドの病院に収容されている子どもたちの6人に1人は親からの暴力によるもので、その結果、イングランドとフランスで年間1,000人に1人の割合で死亡している。最も激しい打撃を受けたのは無防備で、しゃべることのできない2歳以下の幼児だ。すでに1866年の段階で家庭内の労働条件を調査するために設置された公的委員会は次のように結論付けている。「あらゆる証言から明らかなのは、性別を問わず、子どもたちを緊急に保護すべきは実の親からである」(Marx, Karl, *El Capital I*, p. 409.)。Time, 「子どもの権利：最後の十字軍」は実の親に対して一切の権利を持たない子どもたちを報じている。またTime「親に用心」は北米のいくつかの州では、虐待された子どもたちは成人したあかつきには親を訴えることができると通知している。特に両親が知識人だったケースでは、子どもに親に対する25万ドルの請求権を認めている。理由は両親が知識人でありながら子どもに精神的な支援をあたえず、自分たちの都合のみで彼を振り回し、彼が望むものを何一つ与えなかったからというものだ。

Zaidan, George, *The cost and benefit of family planning program* (家族プログラム計画のコストと利益) は世界銀行の研究。

真の限界

人口増加の限界については、往々にして食料・空間・雇用・天然資源、もしくは公害問題等から論じられているが、つまるところ物理的もしくは経済的な二面に集約される。そして、それに第3の要素である個人向け消費が付加されるが、この重要性については後に言及する。

物理的限界

人口増加に対する物理的限界を知るには、農産品に関する詳細な論証や、一人当りの銅の消費、石油の備蓄などの資料がふんだんに用意されている。ここでは総論で十分であろう。

土地は有限である。あらゆる無限の成長は、いかなる限界をも超えていく。そうして後に、遅かれ早かれ人口は限界に達するだろう。

一つの極めて明瞭な限界は物理的空間である。人々が増加を望んでいると仮定した場合、試みに地球上の島々や大陸に足を踏み入れられなくなる年を計算できるはずだ。もしも我々が1平方メートル当たり5名（すし詰め状態の公共交通機関）という数字を受け入れるならば、現在の人口密度はその20万分の1であり、年間2%の割合で増加していくならば、2600年頃に「すし詰め」の限界に達するだろう。これは人類の歴史的な尺度からすれば、明後日のようなものである。しかし、明らかなことは、それ以前に別の限界が迫っているということだ。例えば、もっと少ない人口密度であっても、人体が放出する熱が気温を上昇させ、氷河を溶かし、様々な生活形態を破壊することになりかねないからだ。

マルサスは人口増加の限界は食糧生産力にあると考えていた。確かにその限界は存在するが、当初考えられていたものほど大きくはなかった。今日、差し迫った限界として危ぶまれているのは、再生不能資源、特に化石燃料であろう。ただし、その限界はまた変更されていくものなのだ。テクノロジーの持続的な進歩と相対的な価格構造のみから推論されるべきものではない。限界が近づいているという事実が相対的な価格変動を促し、新たな領域で圧力と機会を生み出すことになり、限界は絶えず更新されていく。つまり石油の不足が価格を高騰させるだけでなく、他のエネルギー源の探求に結びつき、新たな経済チャンスを生み出していくのだ。

そのような漸進的限界と最終的な限界の間には何世紀、もしかしたら何千

年もの隔たりがあるかもしれないし、独裁や大惨事などで人口増加が停止し、いつ何時減少に転じるかもしれない。このように考えるならば、真の物理的限界は使用可能なエネルギーの外側にあり、その有効利用は人知と大いなる摂理のせめぎ合いとなろう。

創造的エネルギーはわれわれを鼓舞し、協力に向かわせる人類最大の財源であり続けている。それに比べれば人間が蓄積してきた財力など高が知れたものだ。われわれは自然に対する感謝を忘れ、日の出に、そして大地の笑りに改めて感謝することもないが、確かなことは、昔の人々はわれわれとは違っていたということだ。彼らは自然の創造性、そこから始まる「労働」の「剰余価値」に生活が支えられていることを認めるとき、われわれに勝る現実感覚を有していた。今、自分たちが自然を搾取していることを嘆かわしく思うならば、そして太陽、大地、星辰が人類に手を差し伸べていることが謙虚に感じ取れるのであれば、われわれは常に摂理に従っていかねばならない。

摂理と手を携えてさらに多くのエネルギー（太陽光・地熱・核融合等）を解放していくのは不可能ではない。利用しない間は蓄積しておき、いざとなれば無線で伝導させていくことも可能であろう。それができれば未知なる限界に向かって物質生産を推進することができるだろう。その物理的もしくは化学的プロセスで引き起こされる物質的減損に関しては、エネルギーコスト X によってリカバリーが考えられる。実際に限定的な数量で安価なエネルギー（水や一次産品等の再利用）があるとすれば、あらゆる資源は、既に述べてきたように限界付ではあるが、再生が可能となるだろう。余剰エネルギーの拡散は破壊的な気温上昇をもたらすだけだ。

いずれも場合も：

- a) 人口増加には物理的な限界がある。勿論、空間的な限界から最終的にはエントロピーの限界（廃物・廃熱のシステム外への廃棄）も同様である。自然の恵みである物理的資源の蓄積は膨大であるが、決して無尽蔵ではない。

- b) 一方で偶発的な限界もある。危機感において劣るわけではなく、実質面での影響が決定的であるもの。例えばメキシコにおける水資源の問題がそれである。

経済的限界

エネルギーの放出は、そのためのエネルギーを全プロセスで必要とする。放出される純エネルギーは取り込まれるもの（貯蔵量）より小さい。しかも放出プロセスを実行する機器の製造のために予備エネルギーが必要となる。

これはエントロピーの減損として否定的に受け止められるが、エネルギーはすべからず減損を免れないため、その純利益は常に初期貯蔵分より小さい。ただし、これを投資収益として肯定的に受け止めることも可能だ。つまり一定量の予備エネルギーを危うくすることは、その使用权を放棄することにより無税の利益を生み、初期投資を上回る収益を予測できることになる。

同様に生産的な仕事に携わる人間を誕生させるには相応のもの——人間としての体面を保つための経費と設備投資——が必要となる。これは世界銀行の研究書が指摘しているように、子どもの数次第で親の消費が制限されるという否定的な形で現れてくる場合がある。またはそれを将来の収益を見込んだ先行投資と見ることもできるだろう。

収益を上げるために必要なことは：

- a) 生産者を誕生させ技能を身につけるためのコストは、彼の将来の収益よりも小さいこと。つまり純益が確保されねばならない（原価を差し引き、必要なリファイナンスがおこなわれること）。
- b) 一連の投資が財務リスクを負わないこと。

これらの必要条件、つまり経済面から見た限界は当該地域の文化や歴史段階、もしくはテクノロジーに直接左右されるものではないが、以上の環境が再生産に関して持続性を有する望ましいモジュールに影響を及ぼすことも確かだ。これまで常に可能であって、今後も可能であろうと思われることは、

一人の人間には彼自身の生産物以上（もしくは以下）のコストが掛かりうるということだ。それに対して、すべての人間に生産物よりも多くのコストが掛かることなどあり得ない。その限界は物理的限界と同様に情け容赦のないものだ。その範疇には住民全体が経費以上の生産に従事している傍らで、割り高のコストで暮らす非生産的な生活者が相当数含まれているかもしれない。また次のような人々もだ。つまり（高齢期、幼児期、病気等の）ライフサイクルで出費が高むときや高価な生産手段に投資するとき、あるいは同族意識の強い人々、もしくは現代の貴族ともいうテクノクラートたちがその帝都に伝説の白い象を飼っておきたいと考える時だ。

同じく投資額が比較的少なく、直ちに回収できるものであればあるほど再生産への融資は可能であったし、今後も同様であろう。反対に困難を極めるは子沢山の場合だ。子どもたちは一定の年齢に達するまで望みのものを消費していこう。仮に、その後、当然ながら首都で築いた人脈を頼りに高価格の製品を大量に生産していくことになろうとも、子育ての大変さは変わらないはずだ。元手の回収が期待できるためには、子どもの数は消費レベルと生産開始年齢からみて少なく抑えるべきだろう。つまり最大消費と遅くなる出産年齢でも、子どもの数が少なければ少々の出費も可能というわけだ。いわゆる土着文化の社会では低コストで生産者を誕生させている上に、彼らは幼少期から生産に従事し、生まれてから死ぬまで僅かな消費でこと足りている。それに引き換え一人のテクノクラートを誕生させるには莫大な金を注ぎ込み、うんざりするほど待った挙句が、その利益たるや疑わしいばかりだ。

個人的対応

一人の人間が人として生存していくために X 量の個人的対応が必要であるならば、生存を放棄しないで済むためには（愛・友情・医療・教育等の） X 量が再生産可能な領域を設定していくことになる。増加の一途をたどる人口の中で個人的対応を拡げていくことは、その破壊、つまり人間の非人間

化に他ならない。なぜなら物質的なコストとは違って、個人的対応には段階別経済など存在しないからだ。

この限界が特に重要性を帯びてくるのは、経済においてサービス部門が増加してくるときだ。そして「上に向かっての平等化」というユートピア的というか扇動的なスローガンが声高に叫ばれるとき、即ち、すべての人間が伝説の白い象のように生産する以上のものを消費できるという願望にとりつかれたときである。

原註

地球の陸地面積は約1億5千万平方キロメートルで、1平方メートル当たり5人分と想定するならば、収容可能人口は750兆人。これは（すでに上回っている）37.5億人の20万倍であり、年間の増加率を2%と見た場合、625年後に相当する。

国家水利計画委員会の「国家水利計画1975」(pp.20-32)によれば、2000年に向けて予測人口1.26~1.39億人のメキシコでは、水資源の20%が再利用水になると見込まれている。これは短期的に見た場合、物理的限界は経済的限界に一致し、莫大な投資と行政の力で雨水や河川水の分配と汚水処理に取り組んでいかねばならない。しかし一人当たりの消費量と年間3%の人口増からすれば21世紀中頃には物理的限界に達するだろう。つまり今生まれてきている子どもたちがその限界に立ち会うことになる。

大学生の再生産

コストの特性

「農民」と「大学生」という2つのプロトタイプがある。さほど厳密ではない上記の定義内容の妊娠・出産時におけるコストの巨大な差額をざっと見ていくことにしよう。

- a) どちらのケースも性交時にはコストが掛からない。理由は（普通は）就業時には行われぬし、（普通は）満足すべき出来事として考えられているからだ。

しかしながら「大学生」の場合は、上記の他にコストを生じさせる要素が存在する。愛の行為の手引書、避妊関係の書物、消臭剤、香水、はてはランジェリーに至るまで一大産業の介入となる。同様に精神分析、オリエンテーリング、人間関係啓発コースからよりよいオルガスムのために医師や女性看護師による実践的指導などのサービスもだ。

さらに言わせてもらえば、これらのコストが「出産計画」か「夫婦円満計画」か、それとも「個人的発展計画」（自分を農民ではないと意識するための必要経費）かどうか疑わしい。言い換えれば、これらの出費の両義性はその立場の両義性ということになる。「生まれる権利」という有名なフレーズでも、確かな事実は子どもが主語ではないことだ。このモラル（そして「新モラル」）からの問題提起は、それが（感動、経済基盤、時間等）必要な裁量をもって愛され、望まれる誕生前の子どもの権利を言っているのではなく、（生まれさせる、もしくは生まれさせないという）親の権利・義務に言及したものであることだ。

- b) 妊娠もまた、どちらのタイプにも同様に満足と困惑をもたらすが、そのコストは、ここでもまた甚大な差を生じさせる。「農民」の場合はプロや産業界が介入してくることはない。それに対して「大学生」では産婦人科、医療検査、書物、講習会、妊婦服などが大きな比重を占める。しかも農婦は自宅で働いているため生産性は落ちないが、都市生活者の場合は相応の損失を被ることになる。
- c) 出産の場合もしかりだ。病院のベッドに身を移すことは、使い慣れたベッドや自宅の設備を放棄し、家族や近所の住人の無料サービス、低価格の自宅の食事に背を向けることになる。また家族や近所の住人が病院に向いてくることもある。その諸経費は（先々たっぷりと回収するためにしばらく出産を控えていた）都市生活者の妊婦が受ける個人的なサービスとは別物だ。
- d) この枠組みは出産以降の母子のケアから幼児教育、その後の教育環

境まで続いて行く。

農婦は母乳を与える。都市生活者の女子大生は産業生産物を利用する。農婦は無料の助言を受け、女子大生は講習会に通い、小児科医に相談し、本や雑誌を購入する。農婦は購入する代わりに女子大生よりも多く裁断し、布を織る。農村の親は部屋が足りなくなれば暇を見て、(日干し煉瓦や泥など)手製の材料を使い、家族や隣人の手を借りて建て増しする。大学生たちはエンジニア、建築家に頼み、産業生産物を使い、左官など当てにはしない。元をただせば農村出身者であっても、都市に住めば家、輸送、種々のサービスにかなりの出費を覚悟することになる。

コストの意味

一人の農民を生み出すためのコストは何よりもまず農産物、即ち、トウモロコシ・フリホール豆・チリトウガラシが実る前に食事に供されるトウモロコシ・フリホール豆・チリトウガラシ次第である。一人の大学生の場合、そのコストは自身がサービスの提供者になる前に成長の大部分を(産婦人科医から大学教授までの)サービスに依拠している。そして、それを意に介することもないかの如く、大学生の経済活動には四半世紀が必要となる。しかも、さあ投資の回収というとき、(時にはそれ以前に)何の配当もなく、新たな家族の中で同じ投資プロセスが反復されるのだ。農村では子どもは年少から一人前の働き手となり、家族サイクルも都市の場合よりは早く始まるだろうが、彼の成長のための投資は、たとえ額は少なくとも現物で回収されていく。

つまり、逆説的に言うならば、原初的共同体では(マヤ神話の『ポボル・ヴフ』にあるように)トウモロコシで作られた人間は、コストを上回るトウモロコシを生産していく。それに引き換え、贅沢な制度の中で個人向け消費で作られている人間が(近代の神話が求めているように)コスト以上のものを生産できるかどうか定かではない。

人類による生産のコスト/利益の特質の一つは、コストがほとんど上限な

しに上昇することに引きかえ、利益はそうはならないことだ。一人のテクノクラートとインディオを対比させるならば、コスト／利益とは無関係に基本的な観点で前者は後者に及ばない。投資収益を価値とみなしてもなおテクノクラートがインディオに勝るとは言い難い。つまり、インディオの方が百倍役立つとは言えないまでも百倍の値打ちがあるということだ。このことはコストの本質に係わってくる。なぜならコストは生産上の純益よりもかなり自由な変数であるからだ。どんな人間も生産コスト過剰でない限り、コスト以上の値打ちがある。金のかかる人間を世に送り出すことは白い象を飼っていくようなものだ。これは高い支払い能力を持つ一握りの人間の贅沢なやり方であって、一般化できる生産的で出資に見合った投資形態ではない。

生活のコストには実質的に限界がない。特に個人向けのサービスにそれが言える。例えば、時に医療現場で行われている10～20名の人間が他者の延命に掛かりきるケースなどだ。つまり彼の生命は彼の生産可能コストよりも高くつくことになる。時間当たりの生産量を上げられる者はいないが、消費量を上げるのは可能だからだ。

ここから（一部では気づき始めているが）予想外のマルサスの限界が考えられてくる。それは親が子に、教師が教え子に、医者が患者に、またペアー同士、友人同士が互いに献身し合える「時間」の問題である。

限界への動向

マルサスの危惧とは反対に農業の一人当たり、一ヘクタール当たりの生産量は人口増よりも大きい。他の産業生産性はさらに大きく伸びていて、これは2つのことを示している。まず人口に占める一定の生産量増加率は、他の活動（第3次産業）に属し、第1・2次産業の生産コストは相対的に小さくなっていること。そしてサービスコストは物質生産との取引条件次第でますます高騰していることだ。

1トンの小麦、ガラス、鋼鉄、紡織繊維は今日では19世紀よりも時間当

たり多く生産されている。だがヘアカットの場合はどうだろう。ジーン・フラスティエは同時代の業界の傾向を資料に基づいて記録し、その生産性がさほど向上していないという理容師を登場させている。つまりヘアカットにはほぼ同じ時間がかかっている。

第3セクターでは長足の進歩はなく——30秒でヘアカットができる技術発明はない——、それどころか強い反対傾向が表れている。衛生に関するあらゆる要求（高品質、もしくは単に贅沢）からますます多くのサービスの時間とコストを要求し、単なるカットの10倍もする「男性美容料金」から医療施設で用いられる天文学的なコストの検査機器一式までが幅を利かせている。それなくして古の床屋の末裔たちはメス1本握ろうとしないのだ。

ここに他の人と同様にサービスを売っている外科医がいるとしよう。彼が販売できるサービスは、一日当たり8時間か10時間、多くても12時間がせいぜいだろう。限界まで働いたならば、後は自給を上げて稼ぐしかない。この場合、時間当たりの生産性を上げるのは困難であるが、製造業に就いて販売に携わっている人間であれば、そうとばかりも言えない。彼に人望があり、値引き交渉に長けていれば他の労働者とは違ってくる。一方、（全員が大学教育を受けるという幻想が始まるまでは）プロの供給は、破滅的な競争を避けるために、厳密な形では規制を受けてきた。他方、外科医の裕福な患者層は、医者自分を自分とほぼ同等の人間だと判断する。言い換えれば、ほぼ同じ生活レベルを享受する権利の所有者と考えているのだ。最後に彼が提供するサービスの特徴は、患者たちは（死なない限り、眼を失わない限り）どのような形であれ支払いに同意することである。

上記のように、すべてにおいてサービス、特にプロから個人向けのもの、とりわけ医者へのサービスは第1次、第2次製品の価格に対して次第に割り高になっていく傾向にある。これは医療・教育・法的機関の問題であり、コストは（個々の生産性にはあえて触れないが）国民生産性の2倍、3倍、4倍にも急激に上昇している。個人向けの配慮が必要な人間の誕生と成長には増々

その傾向が強くなっていく。つまり純益は減少の一途となる。

トウモロコシの生産サイクルでは、疫病、害虫、鳥たちの「搾取」や災害による目減りを承知で、畑にはそれ以上の種をまく。拡大資本による再生産のおかげでトウモロコシは世代から世代を経て豊かに実っている。低価格で暮らすトウモロコシの人間たちも同じことだ。トウモロコシのような個人向け消費は、資本の投下でありつつ生産であり、経費であると同時に利益であり、消費財でありながら資本財、そして黒字と赤字が併存する一つの再生産プロセスである。しかしながら、これは回を追って収益率が低くなり、ついには実りをもたらさなくなる耕作方法で、常に実際の生産量以上のものを求めることになる。安価に暮らす人々は互いに思いやり、高額生活者の個人向け消費などに目もくれず暮らすならば、愛し合い、話に興じ、家族を増やしていくことができる。それに対して高額生活者たちは愛し合うことも、話に興じることも、家族を増やすことも、互いに配慮し合うこともできない。彼らは交換条件が好ましいならば、出産を抑制しなければならず、配慮に互いの目を閉じ、安価に暮らす人々を消耗させていくことになる。これは特権的生態の一解明であって、本来は一般化するべきものではないが、近年明らかになっているように、人口中にあるセクターの比率が大きくなるにつれて上記のような高額消費者も増えていく。

原註

Time 「壁のない病院」は患者自身のベッド、家、設備、そして家族を利用できることから通常のサービスよりも80倍も安くなる快適なサービスを報じている。

ブロンフェンレンナーは「疎外の起源」で幼児に注がれる注意の減少と、対照的に増加していく犯罪、青年の自殺、離婚、嬰兒殺しの関係を記録している。その数字による検証の一例：1歳児を持つ中流クラスの親とのインタビューで、1日平均15～20分しか子どもの相手をしなかったと悔恨に暮れる両親。それを確認するために幼児の体にテープレコーダー付の小型マイクをセットしたところ、真の平均時間は一日当たり38秒であることが判明した。

一人の生産者を生み育てるコストについてはマルクス (*Marx, El capital*, 1, pp. 124-126) と彼の先人たちによって労働力の価値との関係の中で考察された。つま

り生活手段や学習等, 日々の消耗, 市場から撤退することになる病気や死から労働力を取り戻すために必要なものが価値を決定する, としてマルクスはそれらを生産の下位に位置付けている。例えば, 日々12時間労働で生産するためには, 相応の生活手段や学習等が必要で, それらは6時間の労働に値すると考えている。マルクスによれば「特定の国と時代では生活手段の平均総額は一定のファクターを構成している」けれども「それらの価値が変動する, つまりその生産のために必要な労働時間が増減する場合」は労働価値が変わることになる。しかしながら変動の可能性が生み出す効力についてマルクスが考えているのは, 最小限の限界, つまり「物理的に不可欠な生活手段」を生産するために社会的に必要な時間である。彼は最大値を想定せず, 時間当たりの労働再生産は, あくまでも時間当たりのコストと考える。下位の限界は物理的なもので, 衰弱しないために必要な最低限の消費で, 上位の限界は経済的見地から平均的生産性内の消費としている。

(たかはし・さよ 商学部特任教授)